

『生きる力』

愛知県

武徳館剣道教室

小学6年 加藤望友

「何の為に剣道をするのか？それは生きる為」と田村先生は教えて下さいます。

人と話したり、大きな声を出すのが苦手な私の心を強くしたくて、広島にいた二年生の時、母が近所の道場に入門させたのが剣道との出会いでした。道場では「大きな声を出せ、早く行動しろ。」と私にとって苦手な事ばかり言われ、また人に話しかけられない私は、仲間たちとも打ち解けられず、道場では厳しい稽古と先生が待っている恐怖の場でした。いつも必ず体のどこかが痛くなる剣道病を発症しましたが、母は「最初から剣道向きの性格なら、剣道はさせていない。」と言って私を引っ張って行きました。嫌だという気持ちで続けていた稽古では、試合で発揮できる力も付いていなくて、何も結果が出ないまま、三年生の冬休みに地元の名古屋に戻ってくることになりました。武徳館剣道教室では、先生が技のことはもちろん、自分の心や気持ちの持ち方がどれだけ大切か沢山話して下さいます。私が苦手としていた発声についても、丁寧に説明をして下さり、面を付けていれば少し声が出るようになりました。武徳館剣道教室でも稽古が厳しいことは変わりませんが、以前の様に稽古を苦痛と覚えることが無くなってきました。一年半、広島でも稽古を続けていた事は、いつの間にか剣道をするだけの精神力が付いていたと感じました。道場の友達もできて、道場っていいなあと思えるようになりました。

六年生ではBチームに入り、唯一の六年生という事でキャプテンになりました。今まで先輩についていくだけで、試合でも稽古でも気楽にしていた私にとって、この事は今まで剣道をしてきた中で最大の試練でした。チーム結成後、すぐに全国大会出場が決まり、皆の気持ちが高まっている中、私はチームのキャプテンとして何をしたらいいのか、私以外が全員五年生の男子で、本当に皆をまとめていけるだろうか。そもそも私は剣道が強いわけでもないのに、先生はなぜ私をこのチームに入れたのだろうかと悩み始めました。試合を沢山控えた大切な時期に、また剣道病を発症するようになりました。今回は単純に嫌だという気持ちではなく、全国大会という目標へ、キャプテンとして挑むプレッシャーに背中から潰される感じでした。両親からは「剣道やめる？望友を選んだチームの皆はどうなるの？応援して下っている先生にも申し訳ないよね？望友は今、大変な事から逃げようとしているだけ。ここまで来たんだよ。ここで逃げたら先々も逃げる人生になる。絶対逃げてはいけない。まずは全国大会まで頑張ろう。」と言われました。私は広島で、嫌でも続けていた稽古がいつの間にか自分の力になっていた事を思い出し、「東京までは」と自分に言い聞かせ続けました。

日本武道館の基本錬成大会でAチームが決勝まで行き、私も本当に嬉しかったです。普段一緒に稽古をしている仲間たちの姿は誇りでしたが、自分に負けていた私では、その栄光

は手にできない悔しさと、チームの皆にはこんなキャプテンで申し訳ないという気持ちがありました。しかし、先生は「よく頑張ってきたね。」と、先生がもらったAチームの優秀賞メダルを私の首にかけてくれました。そして沢山の人から、「望友の声は大きな日本武道館の観覧席にいてもよく聞こえたよ。凄いね。」と言ってもらえました。試合では結果が出せませんでしたが、困難な事から逃げようとしていた私が、先生方や家族、道場の皆さんが支えて下さったお陰で、全国大会という大舞台に、仲間達と一緒に立てた感謝の気持ちと達成感でいっぱいになりました。初めは理

解が難しかった「生きる為に剣道をする」という田村先生の教えは、困難があっても目標に向かって日々努力する事が、人生を生き抜く力になっていくと、今は分かるようになりました。これからも勇気ある声、打突で一本一本に思いを込めたいです。

自分の生きる力になると信じて。